

profile

みかほり・くすお
1963年生まれ、東京都出身。早稲田大学第一文学部卒業。19歳年にもたる林業・木材業の現場勤務を経て99年より林業・木材分野のフリーライターとして活躍

林材ライター・赤堀楠雄の
「日本林業」異聞

「安全な林業」を目指して

林業が産業として発展するために優先的に取り組まなければならないことのひとつに
労働災害をいかに防ぐかということがある。

現状では他産業に比べて労災の発生頻度が高く、毎年何十人もが亡くなっている。一足飛びに災害ゼロを達成するのは現実的ではないとしても、労災を減らさなければ職業としての魅力は高まらない。林業における労災の現状と対策の最前線を紹介する。

連載

no. 05

労災発生頻度は
全産業平均の10倍超

足元が確かではない急傾斜地での作業が多く、木材という重量物を取り扱い、チェーンソーや刈払機といった刃をもつ動力機械を操作し、酷暑や厳寒といった厳しい気象条件に晒され……。こう列記してみると、林業現場の作業環境は生半ではないことに改めて気づかされる。

最近10年ほどの災害発生状況を見ると、2013年の死者数は1千723人と'03年の2千874人に比べて4割以上減少している(グラフ)。しかし、発生頻度の指標となる死傷年千人率(※1)を見ると、13年は28.7で全産業平均の2.3に比べると実に12.5倍もの高率で災害が発生している。

当然だが労災にはまったくよいこととはなく、本人や家族に耐えがたい苦痛を味わわせることになる。経営面から見れば、災害が多発する職場は社会的信用がなくなるし、労災保険の支払い負担も重くなる。林業の労災保険料率は「60/1000」と

高く、これは金属工業・非金属工業・石炭鉱業の「80/1000」、水力発電施設・ずい道等新設事業の「79/1000」に次ぐワースト3にランクされる。建築事業は「11/1000」だから、林業の料率がいかに高いかが分かる。

機械化や装備の
充実で事故を防ぐ

それでも一応、災害が減少傾向にあるというのは、作業環境が改善されてきているためだ。生身で現場に立ち向かうとなれば災害の発生要因に身を直接さらすことになるが、最近では伐倒や玉切り(伐り倒した木を所定の長さの丸太に切り揃えること)、丸太の搬出といった作業に大型の林業機械が導入されるケースが増えている(写真1)。

機械による作業はコックピット内でレバーを操作すればいいので安全性は格段に向上する。安全用具の進歩も著しい。ヘルメットは言うに及ばず、甲高いエンジン音から耳を守るイヤーマフ、防振手袋、万一チェーンソーや刈払機の刃が当たって

も繊維が刃に絡みついて回転を止め、肌を守る防護服・防護ズボン、強靱な防護ブーツと、フル装備で現場に入れば100%安心とは言えないまでも、身を守る効果は非常に大きい(写真2)。

ただ、こうした機械や装備を導入するにはコストがかかるため、残念ながらすべての現場に行き渡っているわけではない。このあたりは林業の採算性がよくないことと関係していて、収益が思うように上がらないことが経営者に安全投資をためらわせる要因になっている。労災が発生すれば現場が止まったり、入札への参加資格が取り消されたりと、経済的損失も大きくなるのだから「金で買える」安全は買うべきなのだが、目先の負担を避けようとする心理がどうしても働いてしまう。そのためにかえって危険性が高まるという悪循環になっている。

安全投資と

経営改善は比例する

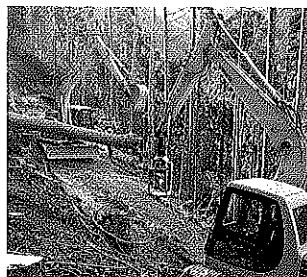
「安全対策に費用をかけることは経営改善にもつながる」と強調するのは、山梨県東部の上野



3: 空調服を着るに付いての下刈り作業。夏天下でも快適で蒸れが少なく、水分補給量も減少した。ファンから取り込まれた空気で服が蒸らるので、熱中症を防止する効果もある

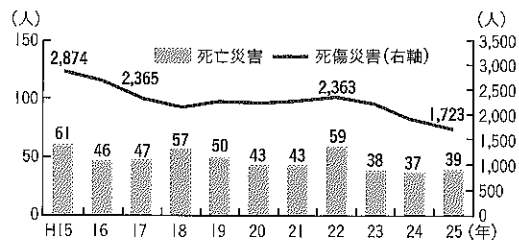


2: 安全対策用ブルゾンで暑さ対策。危険から身を守る事ができる



1: 大規模伐採作業の効率化をもたらすだけでなく、安全対策向上させる効果もある

林業における労働災害発生の推移



資料：厚生労働省「労働者死傷病報告」、「死亡災害報告」

原市、小菅村、丹波山村の三市村を管轄する北都留森林組合の中田無双参事だ。

同組合は11年度に労災が多発し、12年度には山梨県内の林業事業体としては初めて安全管理特別指導事業場に指定され、当局から厳しい指導を受けることになった。それをきっかけに安全対策に力を入れるようになり、KYTの強化やヒヤリハット情報の共有化(※2)に取り組んだほか、安全用具を購入して従業員に支給した。当然費用は

かかったが、事故が防止されるので現場が止まることがなくなっただけでなく、従業員の士気が上がって作業効率が向上し、経営改善が大幅に進んだ。

そのひとつが、下刈り作業時の暑さ対策に今年から導入した吸気ファン付きの「空調服」である(写真3)。(※空調服は、空調服(東京都板橋区)が工場や屋外など、エアコンが使えないところでも快適に作業できるようにと開発した。ブルゾン型の服の後側2カ所に小型の吸気ファンを取り付けたもので、ファンから取り込まれた空気が服と体の間を流れて襟元と袖口か

ら排出される。その際に流れる空気が汗を気化して蒸発させることにより、体の表面が冷やされて快適に作業できる。

電源は小型バッテリーと電池ボックス(単三電池4本使用)の2種類から選べ、バッテリーの場合は最大30ℓ/秒、電池の場合は同20ℓ/秒の風量がある。ファンや電源は取り外し可能で、普通の服と同じように洗濯できる。生地の種類はポリエステル、混紡などから使用目的に応じて選べる。

同組合ではこれを現場職員19人全員に支給。服本体とファン、電池ボックスのワンセットと別売りの充電式電池・充電器で一人につき約1万5千円の費用がかかったが、労働強度が軽減されて職員の負担が軽くなり、作業効率もアップしたことで合計30万円ほどの導入コストは「すぐに元が取れた」(中田参事)という。

林業を「危険な仕事」にしてはいけない

「『林業は危険だ』って言われるが、それは違う」と力を込め

るのは、広島県西部の旧吉和村(現廿日市市)で林業を営む(有)安田林業の安田孝社長だ。

安田社長は息子2人を含む6人の従業員を雇用。4千haの森林を管理し、年間2千500㎡の丸太を生産している。同社ではヘルメット、防護ズボンやチャプス(下半身の防護具)、防護ブーツの着用は最低限の装備で、それらなしでは山に入ることは許されない。そうした安全用具を扱うショップも開設し、自社以外への普及も働きかけている。KYTやヒヤリハット情報の共有化にも当然力を入れている。

「危険なのは危ない作業をするから。林業が危険なのではなくて、作業の仕方が間違っている。危険をいかに排除するかを考えて、正しい仕事をするのが大事だ。危ないやり方をそのままにして『危険な仕事』だなんて言っていてはいけない。そんな仕事に子供を就かせる親はいませんよ」

北都留森林組合や安田林業のように安全対策に力を入れる事業体をいかに増やすか。林業界を挙げて取り組まなければ産業としての未来はない。

※1: 死傷率(千人率) 労働者1,000人当たり1年間に発生する労働災害による死傷者数(休業4日以上を示すもの)
 ※2: 水門(危険予知トレーニング)は事故や災害を未然に防出するため、作業に潜む危険を予想して指摘し合う訓練。「ヒヤリハット」は災害や事故に直接つながらない、その一歩手前の事例